

中国思想文化学

◇教員◇

教授：小島毅、陳捷、横手裕

助教：平澤歩

◇学生◇

学部：2名、修士課程：6名、博士課程：24名

(1) 中国思想文化学とはなにか

「中国思想文化学」という専修課程の名称に、とまどう人がいるかもしれない。高等学校の科目名から内容の想像がつく他の専修課程と比べて、この名称はたしかに少しわかりにくい。だが、このわかりにくい名称は、わたしたちの専修課程が志している学問の新鮮さの証しである。

この専修課程の前身は「中国哲学」を称していた。「哲学」に代えるに、「思想文化」ということばを使うようになったのは、哲学を重要な構成要素としつつ、それ以外の領域をも研究方法に取り込むことをめざしたからである。つまり、哲学・倫理学・宗教学・美学といった、他の専修課程の学問方法のみならず、経学のような中国古来の方法や、文化人類学や科学史など文学部の外にある学問も含めて、およそ考え得るありとあらゆる手法を動員して中国（その影響を受けた東アジアも含む）の人々の思惟を理解していこうというのが、改称の目的である。したがって、研究対象も狭い意味での思想文献にはかぎられない。もちろん、儒教・道教の教説についての研究は、この専修課程の重要なテーマであり、授業でも中心的にとりあげられる。しかし、それだけにかぎらず、いわば無名の人々が、世界について、人生について、どんなふうを考えて日常生活を送っていたのか、また送っているのかを解明することも、中国の文化を理解するには大事なことである。いや、単に対象の理解のためだけではない。わたしたち自身の、ものの考え方や人生観を根本から問い直すことにつながる題材が、そこかしこに転がっている。

要は、研究する主体であるわたしたちが、どんな素材を見つけだして行くかの問題なのだ。その点で、この専修課程では他人（教員を含む）から

与えられた情報を、マニュアルどおりに処理・加工していけばよい結果が出るということはずがない。肝心なのは各自の問題意識である。中国や東アジアの思想文化について何か興味を感じたとき、その興味を深め学問として深化させていくのは、自分自身なのだ。

(2) 授業と専任教員

しかし、勝手な思いつきで自己流に展開したものは学問ではない。そこにはおのずから、長年にわたって蓄積されてきた知見や研究上のルールがある。それを伝授するのが授業の役割だ。

文学部を卒業するために必要な単位の総数は 76 単位だが、中国思想文化学専修では、そのうち 42 単位について、中国思想文化学専修の指定する科目を履修することを学生に求め、残る 34 単位については、学生に大幅な自由裁量を認めている。指定する 42 単位にしても、中国文学や東洋史など、研究対象を共有する他の専修課程が開講している科目から取ることもでき、カリキュラムの自由度はきわめて高い。これは、なるべく多様な分野の学問に触れて広い視野をもってほしいからである。

カリキュラムの中で、もっとも必修的な性格が強いのは、演習への参加である。演習を通じて、文献資料を正確に解読する能力、様々な参考書を使いこなす能力、そして自己の研究成果を人前で発表する能力を身につけてもらう。演習では、古典中国語（漢文）とともに現代中国語が不可欠で、その点では、教養学部の第二外国語（もしくは第三外国語）で中国語をあらかじめ履修しておくことが望ましい。しかし中国語未修で進学した人でも、本人にやる気さえあれば、追いつくことは十分に可能である。

他方、講義の方は概論・概説と特殊講義に分かれている。概論・概説（中国思想文化学概論と中国思想文化史概説）は、中国思想の構造や歴史を広い視野から展開する講義であり、特殊講義は、ある限定されたテーマについて、深く掘り下げた分析を行う講義である。学外からの講師陣も多士済々で、2024 年度には 3 名の非常勤講師を委嘱し、現在我々が見ることのできる文献がどのように伝承されて来たのか、朱子学における基本概念がどのような倫理思想的体系を構想しているのか、そして中国哲学で頻繁に説かれる「聖人」がどのような内容・変遷を有するのかといったことに関する授業を開講している。諸君が進学してくる 2025 年度以降も、さまざまなディシプリンの専門家を招いて、多彩な授業を開講するつもりである。

次に、本専修課程の現在の専任教員とその授業の内容を紹介しよう。

儒教思想と礼教文化を専門とする小島教授は、「思想史」「政治史」「社会史」等といった従来のディシプリン枠を相対化する方法を模索中。演習では、入門書・概説書でおなじみの儒教史像を打破する試みを進めている。日本史にも関心を持ち、専修課程の枠を越えて「東アジアの海域交流」をテーマとした授業も行う。

近現代の学術思想と書誌学を専門とする陳捷教授は、中国の北京大学の出身。清末から民国にかけての古典文献をめぐる日中間の学術交流を中心に研究を重ねている。また清末民初のみならず、書誌学の歴史全般に強い関心を持つ。さらに日中二国に限らず、韓国朝鮮や琉球などの東アジア諸国も幅広く考察の対象としている。

道家道教思想を専門とする横手教授は、異端視や迷信視から学術的研究が遅れていた道教の歴史と思想を、古典読解を中心に文献学的手法で着実に明らかにしてゆこうと取り組んでいる。儒仏道の三教を均等に学び、三教交渉のダイナミズムと中国の精神世界の構造を理解させることにも努めている。

(3) 研究室の様子

最初にあげた数値が示すとおり、他研究室に比して学部学生は多いとは言えない。そのため、「中国思想文化学研究室」として大学院（組織上は「アジア文化専攻」のなかの「東アジア思想文化専門分野」と実質的に一体化しており、授業でも一緒になることが多い。学部学生にとっては、大学院生の先輩たちが勉強や生活についての身近な相談相手となっており、修学環境としては寧ろ理想的規模である。また、大学院等には東アジア各地からの留学生も現在 21 名が在籍しており、日本で生まれ育った者にとってはいろいろと刺激になる知見が得られる。

共同研究室は、2003年に全面改築された赤門地区総合研究棟7階（713室）にあり、学部学生もリファレンス・ツールの完備する明るく広々としたこの部屋を拠点にして、自由に勉強することができる。共同研究室のパソコン群には『四庫全書』のデータベースが収められているから、学生は中国史上最大の叢書である『四庫全書』を、あたかも自分の蔵書であるかのように利用することが可能である。他にも同じく大型叢書の『四部叢刊』をはじめ、各種『道蔵』、各種『大蔵経』、各種史料など、中国思想や中国

学を研究する上で欠かせない主要なデータベース類はほとんどがインストールされていてすぐに使える状態になっている。また、東京大学文学部の漢籍を一括収蔵する文学部漢籍コーナーは同じ建物の6階にあり、東洋文化研究所図書室は徒歩2分の位置にあり、さらに駒込の東洋文庫もバスで10分の場所にあるから、中国を研究する学生にとっては、文献利用の点でも、日本で最も恵まれた環境と言える。

(4) 卒業論文および卒業後の進路について

学生生活は人によりさまざまであるが、おおむね3年生の段階では広く学ぶとともに、読解力などの基礎能力を修得し、4年生になる頃から卒業論文を意識しつつ、次第に関心の焦点を絞り込んでいく。7月上旬に開催される卒業論文構想発表会の頃には、ほぼ論文の狙いが明らかとなり、あとは書くだけということになる。教員も先輩も、論文の作成に対してはアドバイスを惜しまないだろう。

卒業論文をあまり深刻に考える必要はない。わずか2年間の勉強の成果にはおのずから限界があることは重々承知、教員も卒業論文に「完成品」を望んではいない。だが、いかに未熟な作品であっても、その人でなければ書けない何かがキラリと輝いていることが期待されている。これまで、この期待はほとんど裏切られたことがない。

卒業後の進路は多様である。東アジアの国々との結びつきがますます強まっている近年、この専修課程の卒業生は、確かに企業から求められる存在となってきている。就職が良好すぎてか、大学院への内部進学者が以前より減っているのが、むしろ教員側の悩みの種となっているぐらいである。

大学院に進学した場合、すぐれた修士論文が書ければ博士課程への道が開ける。博士課程に進んでからは、数年間外国（中国・台湾・米国など）に留学する者が多い。留学成果を活かしつつ、博士論文を執筆して学生生活を締めくくるのが近年のパターンである。博士課程修了者の研究職ポストへの就職実績は、周囲の厳しい状況に比べれば、まあまあである。

学部卒業で社会に出るつもりでせよ、研究者になりたいと思っているにせよ、あるいはまだ見当もつかないにせよ、中国や東アジアの思想や文化に興味があり、主体的に勉強してみたいと思っているならば、まずは一度、赤門総合研究棟の私たちの共同研究室（713室）に遊びに来てみてほしい。